

## 阿蘇ジオパーク現地審査報告書

委員：尾池和夫、佃栄吉 事務局：渡辺真人

平成 24 年 8 月 21～22 日

主な参加者（敬称略）：小野泰輔（熊本県副知事）、櫛木野史貴（熊本県阿蘇地域振興局長）、佐藤義興（阿蘇市長、阿蘇ジオパーク推進協議会会長）、北里耕亮（小国町長）、北里康二（小国町情報課長）、北里博典（南小国町産業振興課長）、坂本秀俊（阿蘇地域振興デザインセンター事務局長、阿蘇ジオパーク推進協議会事務局長）、郷純雄（阿蘇地域振興デザインセンター）、石松昭信・森由佳・片山彰・徳永美紀（阿蘇ジオパーク推進協議会）、池辺伸一郎（阿蘇火山博物館）、渡辺一徳・須藤靖明（阿蘇ジオパーク推進協議会学術顧問）、山本俊夫・興昭隆典・菅原潔・工藤八代子（阿蘇ジオパークガイド協会）ほか

### 現地審査のまとめ

#### 1) ジオサイトと保全

阿蘇ジオパークには阿蘇カルデラとその周囲の火砕流の作った地形、今も活動する中岳など多くのジオサイトがあり、また古代から人が住んでいた場所として様々な文化的遺産がある。ジオパークのジオサイトとして魅力のあるサイトは多い。阿蘇の自然、さらにはそれに人手が加わった二次的自然、あるいは文化的景観を観光に生かしているという基本方針があり、そのために各種自然・文化遺産の保全活動も行われている。これはジオパークの理念と合致するものである。しかし、それらの各種遺産をジオパークとしての新たな視点から見せることについては、まだ工夫の余地がある。すでに実践されている阿蘇のエコツーリズム・グリーンツーリズムなど各種地域資源を生かしたツーリズムに、地学的要素を自然に取り入れてジオパーク的なストーリーを構築して欲しい。現時点では地学的要素がほかの要素とスムーズに融合していない。野外の説明板が多数設置されたが、その多くの内容は地学の教科書のようなものである。説明板は、ガイド、インタープリターを中心に作成すると良いのではないか。

#### 2) 教育・研究活動

阿蘇火山博物館などを中心に地元の子供たちや修学旅行等でやってきた児童・生徒に自然教育が行われている。また、阿蘇市では「阿蘇市自然体験活動の推進に関する条例」を制定し、ジオパークの自然資源の教育の活動を推進している。ジオサイトの調査研究は、阿蘇火山博物館、熊本大学、京都大学火山研究センターなどと協力して進めている。

#### 3) 管理組織・運営体制

ジオパーク推進協議会事務局は 10 名のスタッフを有する。また阿蘇地域振興デザインセンターからの負担金により、当面は必要な事業費をある程度確保できる体制になっている。各種団体が推進協議会に参加しているが、協議会の下での有機的な連携が全面的には行われていない。GGN は、ジオパークの運営団体が地域の自然・文化・人的資源の活用による新たな持続可能な発展のモデルを示すことを求めており、それは第 5 回ユネスコジオパーク国際会議の島原宣言でも再度示された。世界ジオパーク申請は阿蘇でこれまで多数行われてきたイベントの一つではなく、ジオパークが地域活性化の核となるよう推進協議会事務局が牽引力を発揮することが重要である。

#### 4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

阿蘇地域には従来より活動してきたエコツーリズム、自然保護などの団体があり、また地域資源を生かした街おこしを行っている地域もあり、すでに各種のツーリズムによる持続可能な地域活性化を目指す活動が行われてきている。それら各種団体・地域とジオパークとは協力関係にあるが、ジオパーク推進協議会の下での協力関係から生まれた新たなツーリズム、新たな経済活動はまだ多くはない。地域内での各種団体の協力関係の構築はこれまで阿蘇デザインセンターが担当してきている。世界ジオパークとなるのであれば、ジオパークの名の下で各種団体間、ジオパークを構成する地域間の連携を進めることにより、新たな経済活動の活性化につなげる体制を作る必要がある。

#### 5) 国際対応

年間 20 万人を超える外国観光客が訪れる地域であり、旧来の観光については案内板やガイドマップなど国際対応がかなり進んでいる。外国からの観光客に対応できる宿も多い。外国人を案内できるガイドの要請など、ジオツーリズムの国際化はまだこれからである。

#### 6) 防災・安全

火山ガスによる死亡事故がかつて起こった中岳火口では、火山ガスの観測・警報システムがあり、監視所に人が常駐して安全対策を取っており、外国人観光客への対応も考えられている。京都大学火山研究センターを中心に常時火山活動の観測が行われている。斜面災害を含めた防災教育をこれからジオパークにさらに加えていく必要がある。今年 7 月の災害を契機として、さらに防災・減災につながる教育と地域作りが望まれる。